

# コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

## ムクノキ (*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch.)

田端敬三（近畿大学農学部）keizo\_tabata@ybb.ne.jp



ムクノキ (*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch.) は、従来のエングラーーやクロンキストの分類体系ではニレ科に属していた。しかし分子系統解析による APG 分類体系ではアサ科に区分されている<sup>7)</sup>。本州（関東以南）、四国、九州、沖縄および朝鮮（濟州島）、台湾、中国、インドシナに分布する<sup>10)</sup>。落葉高木で樹高 20m、直径 1 m に成長し、樹幹は直立し、多くの枝に分岐して樹冠を大きく拡げた形状となる<sup>2)</sup>。若木の樹皮は灰褐色で平滑であるが、成長につれて縦の溝が網目状に入り、老木になると鱗片状に剥がれ落ちる<sup>2) 10)</sup>。根張りは板根状を呈する<sup>2)</sup>。

雌雄同株で、4~5 月に葉の展開と共に、雄花が新枝の基部に集散花序をなし、上部の葉腋に 1~2 個、雌花をつける<sup>10)</sup>。果実は開花後すぐ成長をはじめ<sup>6)</sup>、10 月頃に黒紫色の 7~12mm 程の核果をつける<sup>10)</sup>。多少の量の変動はあるが、結実は毎年見られる<sup>4)</sup>。繁殖は実生により、挿し木は非常に困難である<sup>3)</sup>。種子は長さ 6~8mm の球形で、成熟果実を 2~3 日水に浸し、果肉を水洗除去し採取する<sup>4)</sup>。乾燥させると発芽力低下が見られるので、10 月下旬~11 月上旬にとり播きするか、保湿低温貯蔵する<sup>4)</sup>。発芽促進には、短期間の冷水浸漬や低温湿層処理が有効である<sup>4)</sup>。春播きは 3~4 月に行い、4 月下旬に発芽が始まり、5 月上旬に出揃う<sup>3)</sup>。1 年生苗は 45~90cm 程度までになり成長は速い<sup>4)</sup>。病害虫は少なく育苗は容易である<sup>3)</sup>。

本種は、西日本における数 10 年に 1 回の頻度で冠水が発生するような、通気性、透水性に富む砂壌土、砂礫土が堆積した、沖積低地の河川沿いに、エノキと共に優占する森林群落を形成し、これは植物社会学的にムクノキーエノキ群集としてまとめられている<sup>5)</sup>。

また都市域においても残存木が見られ、特に京都市街地内においては、社寺や学校、公共園地などで大木が多数見られる<sup>9)</sup>。また下鴨神社糺の森では、1991 年の調査結果まで、本種が最優占樹種となっていた<sup>11)</sup>。しかし更新には大面積のギャップを必要とし、糺の森林床での調査では、林冠木枯死跡地においても実生発生は少なく<sup>12)</sup>、小規模のギャップでは定着率も非常に低い値であった<sup>8)</sup>。

古事記にもその名が見られる程、本種は古くから人々の生活に密接に結びついてきた。材の容積密度は 0.60g/cm<sup>3</sup>~0.93 g/cm<sup>3</sup> 程度であり<sup>2)</sup>、強度は中程度であるがしなやかで割裂しにくく<sup>2)</sup>、農具、工具の柄、器具や家具、建築材その

他に用いられる<sup>2)</sup>。また葉の表面はシリカを含む短毛が密生し、著しいざらつきが見られ、乾燥させて、各種木製品、べっこう、象牙など工芸品の仕上げ研磨に使用された<sup>2) 10)</sup>。果実は甘く食用となり、またムクドリなど野鳥の貴重な食料ともなる。本種の大径木は洞を形成しやすく<sup>1)</sup>、アオバズクの営巣環境となり、市街地内において樹洞性動物の貴重なハビタットを提供する。また大高木まで成長する落葉樹であるため、多様な自然景観を創出し<sup>9)</sup>、優占樹林は明るい雰囲気を有し、林内散策等のレクリエーションにとっての好適な場となる<sup>9)</sup>。こうした点から、都市の緑地のシンボル的樹木としての活用が大いに望まれる。

### 引用文献

- 1) 橋本啓史・澤邦之・田端敬三・森本幸裕・西尾伸也 (2006) 京都市街地における樹洞を有する樹木の特徴、ランドスケープ研究, 69 (5) : 529-532.
- 2) 平井信二 (1996) 木の大百科 - 解説編, 朝倉書店, 642 pp.
- 3) 関西地区林業試験研究機関連絡協議会育苗部会編 (1980) 樹木のふやし方, 農林出版, 340 pp.
- 4) 勝田恆・森徳典・横山敏孝 (1998) 日本の樹木種子 広葉樹編, 林木育種協会, 410 pp.
- 5) 宮脇昭編 (1984) 日本植生誌 近畿, 至文堂, 596 pp.
- 6) 岡本素治・北島浅子 (1988) 液果樹種における果実の生長と鳥による消費の過程の観察, Bulletin of the Osaka Museum of Natural History, 42 : 1-13.
- 7) 大場秀章編 (2009) 植物分類表, アポック社, 513 pp.
- 8) 坂本圭児・小林達明・池内善一 (1985) 京都・下鴨神社の社寺林における林分構造について, 造園雑誌, 48(5) : 175-180.
- 9) 坂本圭児 (1988) 都市域におけるニレ科樹林および孤立木群の残存形態に関する研究, 緑化研究別冊, 2 : 1-129.
- 10) 佐竹義輔・亘理俊次・原寛・富成忠夫 (1999) 日本の野生植物 木本 (1), 平凡社, 321 pp.
- 11) 田端敬三・橋本啓史・森本幸裕・前中久行 (2004) 糺の森におけるクスノキおよびニレ科 3 樹種の成長と動態, ランドスケープ研究, 67 (5) : 499-502.
- 12) 田端敬三・橋本啓史・森本幸裕・前中久行 (2007) 下鴨神社糺の森における林冠木の枯死とそれに伴う木本実生の侵入定着過程, 日本緑化工学会誌, 33 (1) : 53-58.